

論文の要旨

論文題目 新聞語彙の比較語彙論的考察
朝日新聞天声人語・オピニオンの語彙を通じて

氏名 宋正植

学位 博士(文学)

授与年月日 平成 16 年 7 月 30 日

本論文は、比較語彙論の立場から新聞語彙の意味構造を明らかにしようとしたものである。比較語彙論とは、語彙を比較という手段により総体的・計量的に扱い、そこに反映する「文化」をも究明しようとする研究方法である。

第 1 章では、比較語彙研究の意義を論じるとともに、語彙調査の対象、意味分野別構造分析のためのコード付け、カイ二乗検定処理など、語彙調査に関する作業過程を詳述している。

第 2 章では、語彙研究に関する先行研究を概観している。はじめに国立国語研究所が行った一連の語彙調査の中身に触れた後、比較語彙研究を提唱すると同時に、それを実践している田島毓堂の業績を紹介している。

第 3 章では、2 つの異なる時期（1946 年と 2000 年）に書かれた「天声人語」の語彙を対象にして、単語コードによる意味分野別構造分析を行い、それぞれの語彙の持つ意味分野別の特徴として以下の諸事実を指摘している。

意味分野別構造分析（整数部分を含めたもの）に関して：

- (1) 単語コードの整数部分に焦点を合わせた類による分析では、異なり語数と延べ語数はいずれも、体の類（名詞）> 用の類（動詞）> 相の類（類形容詞・形容動詞）> その他（接続詞・感動詞）の順となる。
- (2) 小数点以下第 2 位までの中項目による分析では、たとえば「相の類」において、2000 年におけるより 1946 年において有意に大である項目が多いことが分かる。これによって、個々の言語表現の時代的推移をとらえることができる。

意味分野別構造分析（整数部分を除いたもの）に関して：

- (1) 小数点以下第 2 位までの分析では、その意味分野を表す全体の項目数は 44 個であり、

その中でカイ二乗値が最も高いのは1946年の(植物)、2000年の(量・過不足・程度)項目である。

- (2) 小数点以下第3位までの分析では、全体的傾向として、1946年には「人間活動 精神および行為」、「人間活動の生産物 結果および用具」、「自然 自然物および自然現象」などの意味分野の語が多く、2000年には「抽象的關係(人間や自然のあり方のわく組み)」と「人間活動の主体」を表す意味分野の語が多いことが分かる。

第4章では、二つの異なる時期(1946年と2000年)に書かれた「オピニオン」(朝日新聞)の語彙を対象にして、単語コードによる意味分野別構造分析を行い、それぞれの語彙の意味分野別特徴として以下の事実を明らかにしている。

意味分野別構造分析 (整数部分を含めたもの) に関して：

- (1) 単語コードの整数部分に焦点を合わせた類による分析では、異なり語数と延べ語数はいずれも、体の類(名詞) > 用の類(動詞) > 相の類(類形容詞・形容動詞) > その他(接続詞・感動詞)の順となる。
- (2) 小数点以下第2位までの中項目による分析では、たとえば「体の類」の(人種・民族)の項目において、「国民、日本人、天皇、人民、大衆、琉球人、沖縄人、朝鮮人」などの語の使用頻度が高いことが分かる。

意味分野別構造分析 (整数部分を除いたもの) に関して：

- (1) 小数点以下第2位までの分析では、たとえば(家族・親戚)の項目の場合、2000年において「息子・親・娘」や「家族・父・子・母・母親」などの使用が目立って多いことが分かる。また2000年には「～さん」以外に「～ちゃん」という表現も多く使われていることが注目される。
- (2) 小数点以下第3位までの分析では、その意味分野を表す全項目数が305個にのぼる。その中で、異なり単位でも延べ単位でも共通して有意に大であるのは、1946年の場合も2000年の場合も19項目である。

第5章では、「天声人語」の語彙と「オピニオン」の語彙とを比較し、以下の点を明らかにしている。

1946年の「天声人語」と「オピニオン」とを比較した結果に関して：

- (1) 類による分析では、「オピニオン」と「天声人語」の語彙は非常に似ていることが分かる。両語彙ともに、体の類、つまり名詞の割合が非常に高い。
- (2) 部門による分析では、両語彙ともに、有意に大である項目数は延べ単位より異なり単位の方が多いたことが分かる。
- (3) 中項目による分析では、その意味分野を表す全体の項目数が約90個にもなる。これ

らを大きく「体の類」、「用の類」、「相の類」「その他」に分けた場合、たとえば「体の類」において、異なり単位と延べ単位の両方に共通して差が生じた項目として「オピニオン」では、(空間・場所)(相手・仲間)(取得)の3項目があげられ、「天声人語」では(形・型・姿)(人種・民族)(公私)(機関)(創作・著述)(自然・物体)(生物)の7項目があげられる。

続いて、2000年の「天声人語」と「オピニオン」とを比較して結果に関して：

- (1) 類による分析では、「オピニオン」と「天声人語」の語彙は非常に似ていることが分かる。両語彙ともに体の類、つまり名詞が非常に高い割合を占める。
- (2) 部門による分析では、「オピニオン」の場合、体の類における(人間活動)(自然)の2項目、相の類における(自然)の1項目、合わせて3項目が有意に大である。一方、「天声人語」の場合には、体の類における(抽象的關係)(人間活動の主体)の2項目、その他における(抽象的關係)の1項目、合わせて3項目が有意に大である。
- (3) 中項目による分析では、その意味分野を表す全体の項目数は約90個となる。有意に大であった項目は、「オピニオン」では、体の類において(取得・所有)(仕事)(作用)(支配・政治・革命)(食料)(交わり)の5項目であり、用の類において(文化・風俗)の1項目、相の類において(光・音・色)(火・水・気象)の3項目である。一方、「天声人語」では、体の類における(量・数)(人種・民族)(社会)の3項目である。

以上のように、本論文は比較語彙論という枠組みの中で新聞語彙を分析したものがある。比較語彙論は、総体としての語彙を比較という方法により計量的に扱い、そこに反映する文化をも明らかにすることを第一目標にかがけているが、本論文のもくろみはそのような趣旨にそったものである。そしてそのもくろみは、厳密な手順を踏み、多大な時間を費して行った調査によって一定の成果を確実におさめている。また、比較語彙論はさまざまな利用に付すための電子辞書・データベースの製作をめざしているが、本論文はそれを行うための貴重な基礎資料たりうる。